

日面遺跡

所在地 豊田市下山代町入道地内
(北緯 35 度 1 分 33 秒
東経 137 度 18 分 33 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成 25 年 5 月～平成 26 年 2 月

調査面積 9,000 m²

担当者 小澤健次郎・鈴木恵介・三輪みなみ

調査の経過 平成 23 年度に豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う事前調査として、委託を受けて実施した。日面遺跡は昨年度も、神デンB遺跡とともに調査を行っており、範囲確認調査を含めると今回で 3 回目になる。

立地と環境 日面遺跡は豊田市西部の下山代町に所在する。下山代町は北側を国道 301 号線に沿って流れる郡界川、南側を岡崎市保久町に隣接している(写真 1)。標高約 400m あり、いわゆる里山が形成されている。周辺の遺跡として、代官屋敷遺跡(縄文、中世)がある。

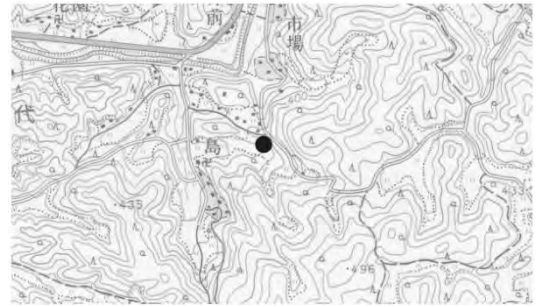
調査の概要 本年度の調査地域は、すり鉢状の傾斜地で、西側集落に向かって谷が開口している。底に当たる区域は昨年調査した中世以降の耕作地跡である。調査区を開口部から時計回りに A～D 区まで設定した。その後、調査の段取りから B 区の一部を E 区、C と D 区は C a と C b 区、D a と D b 区にそれぞれ細分した(図 1)。調査の結果、弥生～古墳時代を除く、縄文時代～近世の遺構・遺物を検出したが、主要な時期は中世である。(小澤健次郎)

1 3 A 区 A 区は遺跡の北西部に位置する。最上部が奥行きが少ない平坦面を成し、下位の多くが南面する急な斜面で形成される。南端の境界を B・C 区と接し、東端は斜面上位部で E 区、下位部で B 区と接する。調査面積は約 1,313 m² である。

主な層序は、花崗岩の岩盤・風化土を最下の地山として、下から順に「黒色土層」、「暗褐色土層」「耕作土(近現代)」となる。「黒色土層」は縄文早期、後期の土器を包含し、拡がり幅約 10m、長さ約 20m、厚み 0.2～0.6m を測る(写真 2)。「暗褐色土層」は、灰釉陶器(詳細な時期不明)、山茶碗(尾張瀬戸系 4、8 型式)、渥美・湖西系(尾張瀬戸系 5 型式相当)を包含する。遺物の上限は灰釉陶器、下限は山茶碗(尾張瀬戸系 8 型式)が示す。上述の平坦面は「暗褐色土層」を埋土としている。

遺構(図 2)は、幅 1～2m 程度の奥行きが残存する平坦面を 8 カ所、径 0.2～0.5m の土坑を 58 基、底面に焼土が多く残存する土坑 1 基(026SY)、幅 1～1.5m の溝 1 条(014SD)等を検出した。平坦面は、黒色土層上では黒色土を削平し(050SN、写真 3)、それ以外では花崗岩の風化土を削平して形成している。出土遺物から平坦面は鎌倉～室町期に削平を受けたと考えられる。

遺物は、平坦面上の「暗褐色土層」から灰釉陶器、山茶碗が出土している。上述の尾張瀬戸系、渥美湖西系等の特徴を持つ群があり、今後は出土層位・位置を詳細に検討する必要がある。また、「黒色土層」からは縄文土器(写真 4)・石器(石鏃・スクレイパー・剥片)等が出土している。詳細な検討は行っていないが、「黒色土」上層からは縄文時代後期の土器、



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)

最下層の地山直上では縄文時代早期の押型文土器が出土している。

(鈴木恵介)

13 B 区 B区(写真5)は遺跡の東北に位置し、東に奥行きのある大きな平坦面を2面(001SX、002SX)と小さな平坦面を複数有する。東の沢でCa区と接し、北でE区、西でA区と接する。調査面積は約2,183㎡である。

調査区の主となる002SXの層序は、おおよそ下から順に「黄褐色土層」、「黒褐色土層(中世)」、「盛土層1」、「耕作土層(時期不明)」、「盛土層2」、「耕作土層・旧表土(近世後半～近代)」、「表土(現在)」となる。平坦面を拡張するために、山側の斜面を切り崩し、この土で谷側を埋め立てている。よって山側では地表近くで岩盤が露出し、谷側では厚い盛土層がみられた。平坦にならされた岩盤を掘りこむ形で検出された遺構内の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、岩盤露出部西側の資料は12世紀後半～13世紀中頃、東側の資料は17世紀後半～20世紀中頃であった。従って、盛土層の堆積状況を考慮しても、中世以降少なくとも2度に渡って平坦面を拡張したと思われる。

遺構(図3)は、002SXから「黄褐色土層」・「黒褐色土層」を掘りこむ小土坑が100基以上検出されたが、柱穴として明確に並ばなかった(写真6)。また、地面を掘りくぼめて底部を平坦にしたと思われる堅穴状遺構(333SK)と被熱痕が2カ所検出された。調査区最下段からは自然流路に伴う木杭が2点確認された。また、002SXの表土を除去した面では埋甕(067SJ)・井戸(044SE、写真7)・石垣等が検出されたが、礎石等直接建物と関連する遺構は発見されていない。井戸は地表から深さ1m程度で、木組みの上に石が積まれていた。廃絶時に埋め戻した形跡はなく、埋土の半分以上は時間をかけて堆積した昭和・現代の層である。また、001SXからは耕作に伴うと思われる溝が検出されている。

遺物は「黒褐色土」中と「黄褐色土層」の上層から山茶碗(尾張瀬戸系5～10型式や渥美湖西系)を主体としてすり鉢・内耳鍋・青磁等が出土した。灰釉陶器破片(猿投、O-53号窯式)も黄褐色土層直上から出土しているが数は非常に少ない。「耕作土層・旧地表」からは近世後半から戦前頃の陶磁器や瓦等が出土している。平坦面では耕作の影響のためか遺物は小片が多く、良好な状態の陶磁器やガラス瓶は斜面や石垣の隙間から出土している。

(三輪みなみ)

13 C 区 C区(写真8)は遺跡中央に位置する。すり鉢状の斜面上部と下部の標高差は約15mあり、調査前は25の平坦面が、棚田状に谷奥から下部に形成されていた。調査区北側の沢は東から西へ、南側の沢は南から北へ流れている。C区はこれらの沢を隔ててB・Db区と隣接している。調査面積は約3,154㎡(Ca区1,849㎡、Cb区1,305㎡)である。

13 Ca 区 Ca区の層序はおおむね下層から順に地山(岩盤)、造成土、耕作土、腐葉土である。範囲確認調査で遺構と考えられた層は耕作土と造成土の間か造成土と地山の間と判断し、斜面上部より掘削を行った。造成土と地山は拳大～人頭大位の礫を多く含む点で類似するが、土色が異なる。切り土による酸化の影響が考えられることから、赤みの強い方を造成土と判断した。また、地山を切り崩したものの、造成に使用されなかったと思われる土が丘状に堆積している箇所があった。東側斜面上部には北側の沢に流れ込むかたちで地山上面に黒褐色土の広がりを確認した。検出位置は棚田状の平坦面の肩に当たり、斜面地の地山上面に堆積していた黒褐色土を含む土壌を切り土して平坦面を造成したことがうかがえる。

遺構(図4)に関しては、旧耕作土上面を除去し現れた棚田状の平坦面(202～227SX)

に伴う石積み遺構が、ほとんど例外なく各段で検出された。石積みは地山の掘り込みや裏込めがなく、斜面に石を貼り付け積み上げただけの簡易的な施工であり、強度は低く、崩れた部材が多く検出された。その他の石積みには、北側斜面下部に土留めのために置かれたとみられる石積み列（011 S W）と、道路状遺構（440 S F、写真 9）がある。道路状遺構は、調査区ほぼ中央の南北方向に、幅約 1 m で平行する 2 つの石組みを設置することで構築されていた。石積み間の土は、道路を意識して上面を突き固めた痕跡はみられなかった。また石積み以外では、炉跡（238 S L、写真 10）遺構が検出された。地山を約 1 m 四方（西向き矩形）に 0.3~0.4 m 掘り込み、内部には焼けた石と多量の炭化木材、骨が混入していた。骨は人骨の可能性もあり、遺構の解釈が変わることもあり得る。他には、礫の集積遺構（441 S X、504 S X）が 2 か所検出された。

遺物は、旧耕作土から近世以降の陶器破片が数点、黒褐色土やその直上周辺からは山茶碗破片数点が出土しているが、遺構に関連する遺物は炉跡（238 S L）出土遺物のみである。

13 C b 区 層序や平坦面造成状況は C a 区と同様である。ただし、黒褐色土層は検出されなかった。盛り土による平坦面造成が多く、特に斜面上部南端部は地山斜面に最大約 2 m を盛り土し平坦面を造成していた。平坦面に伴う石積みも C a 区と同様に設置されていた。遺物はほとんど検出されなかった。 （小澤健次郎）

13 D 区 D 区は遺跡の南半部分西側の北面・東面する斜面の下位に位置する。C b 区側の沢に面した東向き斜面に平坦面が確認できる。その他では傾斜の緩い東西方向の沢沿いに大小の平坦面が確認できた。北端部は 2012 年度調査区と接し、東端部は北流する沢を境界とし C b 区と接する。調査面積は約 1,749 m²（D a 区 1,288 m²、D b 区 460 m²）である。

13 D a 区 D a 区の調査は、表面の腐食土・耕作土を除去し地山や江戸時代以前の堆積層を検出して行った。その結果、B、C a 区で見られる山茶碗を含む「黒褐色土」は検出されず、D 区最大の平坦面 160 S X 斜面寄り（南寄り）の位置で「黒褐色土」と似た色調の層を確認したが無遺物であった。この層の上位の「褐色土層」からは時期不明の縄文土器らしい破片が数点出土している。160 S X を造成する最下位の「褐灰色土層」からは江戸時代後期の美濃産陶器破片が検出され、地表では近代までの遺物が出土したことから、160 S X は江戸時代後期以降に造成され、近代まで利用されていたと思われる。

遺構（図 5）は、地山直上の検出面にて竪穴状遺構 3 基（写真 11）、小土抗 25 基、これらの埋土は前述の「褐灰色土」と同様、中世～近世前期の遺物が出土している。その他には石積み 2 基を検出している。石積み 368 S W 下部には、前後両側を杭で留めた胴木を備えている（写真 12）。杭は斜面上位側の後面側が短く、谷側を向く前面側が長い。前面に打設された杭は最長で 0.6 m あり、0.4 m 程度が花崗岩の岩盤に打ち込まれている。地表では、広さが約 300 m² ある 160 S X から、礎石列（120 S B、写真 13）・井戸（150 S E）・溝（148 S D）等が確認できた。

遺物は、縄文土器、山茶碗、陶器、磁器が出土している。磁器には青磁破片が 2 点含まれ、いずれも龍泉窯産と考えられる。

D a 区の調査で検出された「褐灰色土」は斜面下位、すなわち沢沿いの緩傾斜地周辺で多く検出され、沢に近づくほど層の厚みを増す。上述の中世～近世前期の遺構・遺物はこの層より多く出土する。この年代は 2012 年度神デン・日面遺跡 12 B・C 区の調査において検出

された石組溝 009SD、014SDの埋土（覆土）と近似している。2012年度の年報では、石組溝 009SD、014SDの年代は、「中世～近世初頭」としてきたが、今年度調査の「褐色土」の年代と同様に江戸時代後半まで下る可能性がある。

13D b 区 D b区は地表面には巨石が露出する場所が多く、平坦面も小規模である。調査の結果、耕作土直下には花崗岩風化土があり、顕著な遺構は検出されていない。遺物は、地表面直下の耕作土から近世～近代の陶器・磁器破片が検出されている。これにより、D b区付近は江戸時代後半以降に耕作を受け、平坦面が形成されたものと考えられる。（鈴木恵介）

13E 区 E区（写真 14、15）は、遺跡の北側、南面する斜面の上位に位置する。境界は、南側と東側をB区と接し、西側をA区と接する。調査面積は約 610 m²である。

E区の地表面では、最上位の調査区際にやや平坦な場所が確認できた他は傾斜面が連続し、特にB区 002SXと接する部分は花崗岩岩盤が露出する崖となっている。この崖は人為的な改変によるもので、002SXの造成に伴い室町期ごろに削平された結果と考えられる。B区 012SXとの東側境界は、012SXの下位に潜る急傾斜が確認できており、こちらは自然が要因で形成された崖面と考えられる。このE区東側境界以東～C区西側付近までは谷が深く入っており、この谷には人力では容易に移動できない巨石が多数みられ、斜面上位より巨石が谷筋に転落してきたものと考えられる。B区ではこの巨石の隙間や下に堆積する黒褐色土中から尾張瀬戸系 7～8 型式の山茶碗が検出され、巨石の上には江戸期後半の陶器破片等が検出されていることから巨石は室町期以降、江戸期後半以前に転落してきたものであろう。

遺構（図 5）は、平坦面が 4カ所、特に西側のものは約 9～12m と規模が大きい。土坑は約 20 基、溝は 6 条検出されたが、ほとんどが平坦面の上位斜面側基部に位置するものである。

遺物は少なく、各遺構の時期決定には不十分である。地表面直下の耕作土からは、山茶碗～近世・近代の陶器破片が出土している。斜面最上位には狭い範囲で「黒色土」（写真 16）が広がるが精査の結果、遺物は検出されていない。（鈴木恵介）

ま と め 日面遺跡は、先史（縄文）、古代（平安）、中世（鎌倉～室町）、近世（江戸）、近代（明治～昭和初）の遺構・遺物を有する遺跡である。縄文時代の遺構は発見されなかったが、A区「黒色土層」とD a区「褐色土層」からは縄文土器や石器が出土している。古代（平安）の遺物は極めて少ない。中世（鎌倉～室町）に比定される遺物は山茶碗を中心に各区で出土している。遺構は耕作地跡（A、E区）や竪穴状遺構（B、D区）、小土坑（A、B、D区）等が検出されている。近世・近代（江戸～昭和初）に比定される遺物も各区で出土しているが、特にB・D a区で画材や薬瓶等が多く出土していることから当時の人々の生活が物質的に豊かであったことがうかがわれた。B区では多くの瓦、D a区では礎石が見つかり、この 2 地点には建造物があったと考えられる。また、B区には大正末・昭和初期頃まで人が住んでいたが、D a区の建物については全く知らないという証言をB区居住者の御子孫（70代）から得ている。従ってD a区も昭和初期までには利用が終了したと思われる。

本遺跡の発掘調査により、日面遺跡では人間活動が活発となったのが、おおよそ中世以降であることが分かった。山側の斜面地を削り、土を谷側に押し出すことで平坦地を造成し、居住ないし耕作を行っていた様子を明らかにすることができた。（三輪みなみ）



図1 日面遺跡調査区図 (1/1000)

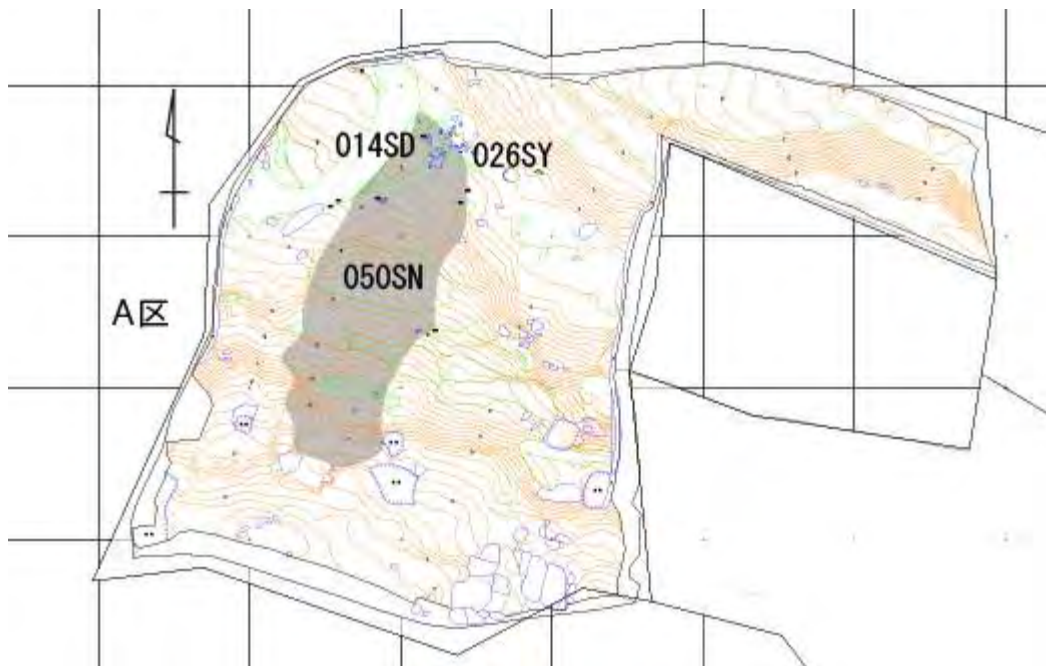


図2 A区遺構配置図 (1/500)

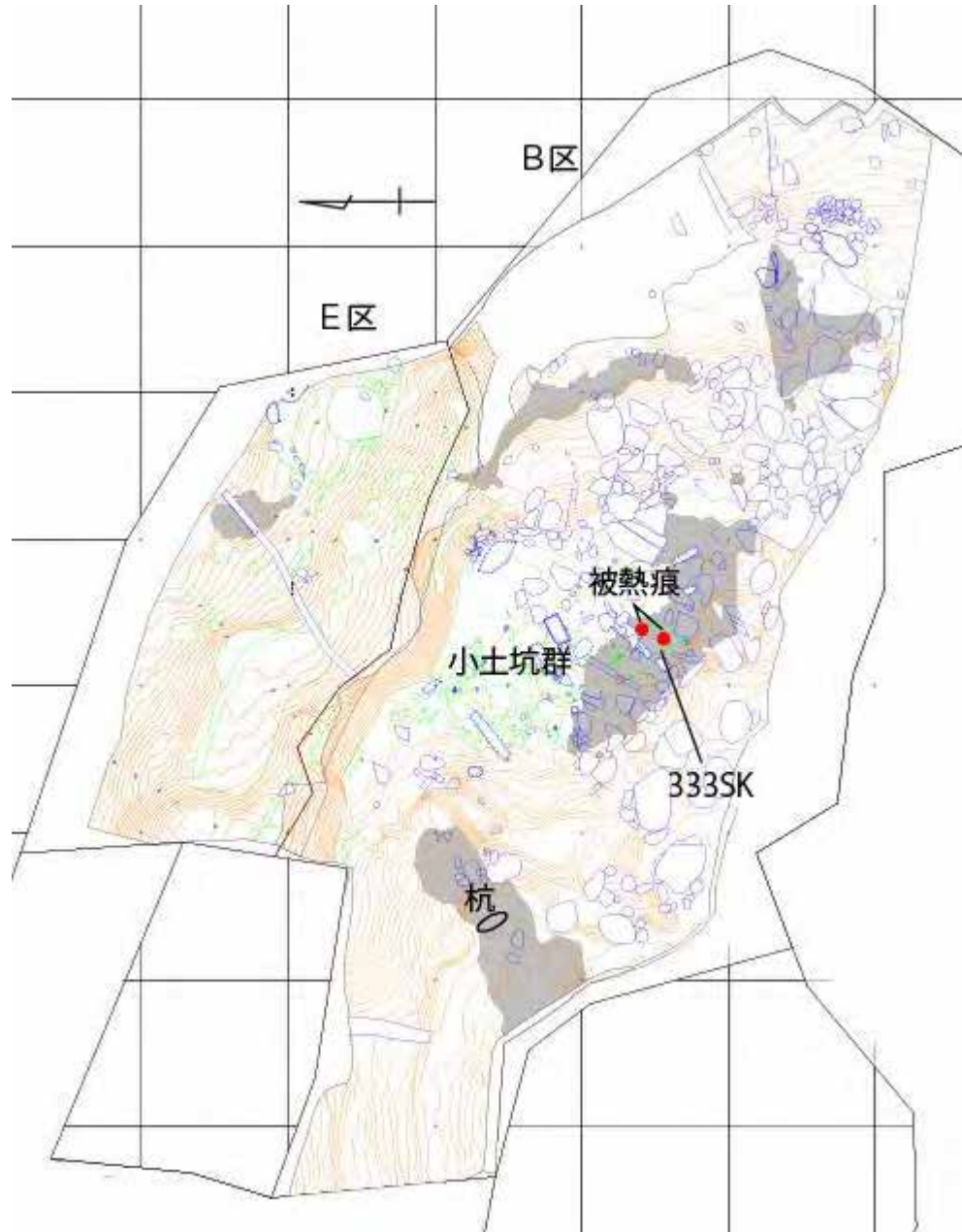


图3 B、E区遺構配置図 (1/500)

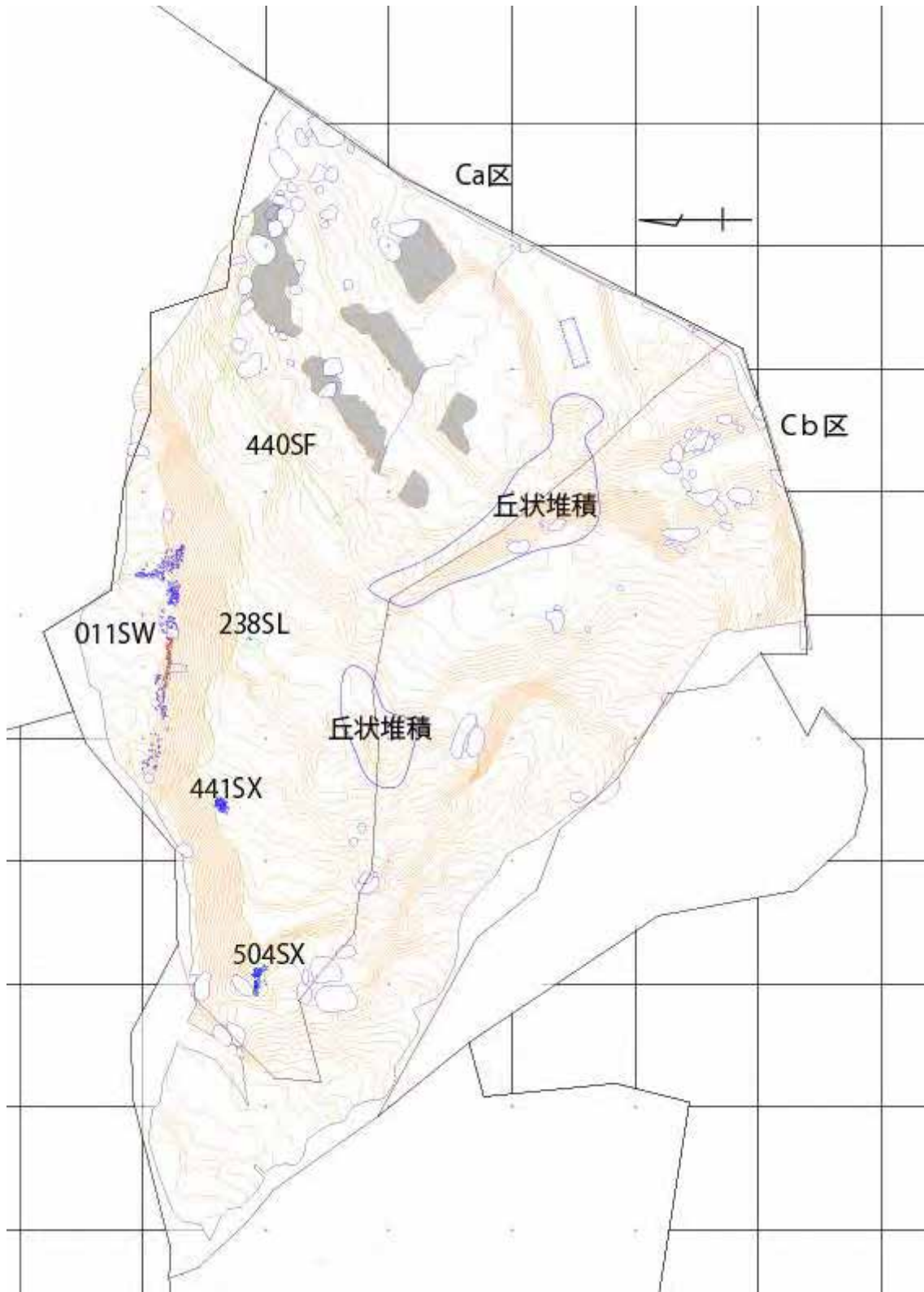


图4 C区遺構配置図 (1/500)



図5 D区遺構配置図 (1/500)



写真1 日面遺跡遠景 (右下)



写真2 黒色土 (A区)



写真3 縄文土器 (押型文、A区)



写真4 050SN (A区)



写真5 B区全景 (南西から)



写真6 小土坑群 (B区)



写真7 044SE (B区)



写真8 C区全景 (北から)



写真9 440SF (Ca区)



写真10 238SL (Ca区)



写真11 367SK (Da区)



写真12 368SW (Da区)



写真13 160SX内 120SB他 (Da区)



写真14 E区全景 (南から)



写真15 E区 (西から)



写真16 黒色土 (E区)